

### 編集後記

第68巻第2号をお届けいたします。本号は、第123回日本医史学会総会・学術大会の抄録号となりますが、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の猛威は2年以上続いており、既に前の2回の総会・学術大会がオンライン開催となっております。編集後記の執筆時(2022年2月)においてもなお沈静化する気配をみせませんが、社会の動きとしてはCOVID-19の「終息」=完全制圧を目指すのではなく、ある程度感染リスクが低減され社会活動が持続的に行える状態=「収束」を目指すフェーズへと切り替わりつつあるように思えます。

本学会のサイトには、「医史学では、医学の歴史のみならず、それに関連するあらゆる領域の歴史を幅広く探究」し、そこには「医療による病の癒やしとその社会・文化との関わり」などが含まれる、とあります。社会の中での諸要素のバランスを考慮しなければならない「収束」を目指すフェーズにおいて、もとより学際的な性格を持つ本学会の社会的使命・役割は、いや増すばかりと考えます。内外の状況に対応しながらその使命・役割を果たしていくために、会員の皆さまのさらなるお力添えをお願いいたします。

(松村 紀明)